伴信友と上田百樹

山崎芙紗子

さきに拙稿「伴信友旧蔵書の書誌学的研究(下)」(『国語国文』昭和61年1月号)において、伴信友(一七七三～一八四六)の学問形成に上田百樹の影響があったのではないかとの推測を述べた。同じことを、佐伯有清氏は『新撰姓氏録』の研究をとおして予測されている(日本思想大系『平田篤胤　伴信友　大国隆正』解説)。しかし、同氏もいわれているように、百樹の伝記はほとんど未詳で、どのような学風の国学者であったかさえ明らかでない。上田百樹の人と学問を紹介し、伴信友との関わりを探ってみたいと思う。

上田百樹、本姓波伯部(はばきべ)、俗称を鍵屋藤助(平左衛門)という京の町人である。生年未詳、歿年は一説に文化九年であるという。寛政九年十一月二十一日、同じく町人の奈須守彦、長谷川菅緒と共に本居宣長に入門している。住居は京錦小路室町西入南側、これは同年三月に入門した城戸千楯の書肆蛭子屋(えびすや)の向い側である。そして後年鈴屋派の京都学問所が一時期置かれていた場所に該当する。そして、享和元年(＝宣長の歿年)当時の京の有力な門人たち、長谷川菅緒、服部敏夏、七里蕃民といった人々も殆ど同じ町内の住人であった。百樹は中でも宣長に学問を認められ、宣長の日本書記の注釈書『神代紀髻華山陰(うずのなまかげ)』には百樹の説がわざわざ紹介されている。宣長が紹介した百樹の説は、書紀の本伝と異伝の記載の記載方式に関する見解であり、書紀編纂の問題に関わってくるだけに、百樹が早くから、むしろ宣長に入門する以前から、日本書紀に関心を寄せ、書紀の諸本に関しても一見識を備えていたことを語っている。

一方、百樹の出自は、宣長の『鈴屋集』巻九に収められている「上田百樹かこへるによめる丹波国桑田郡なる小幡神社に奉れる燈籠の長歌」から、百樹の祖父は桑田郡穴太(あなう)の人であったことがわかる。さらに、小幡(おばた)神社は江戸時代を殆ど通じて、そして現在も上田氏が宮司を勤めており、百樹が小幡神社に何らかの由縁を持つことは充分予測されうることである。現宮司のお話によれば百樹の名は上田本家の系図に見当たらず、百樹の墓も穴太にはないとのことであった。百樹が神官の出であれば、書紀研究に志したことはすぐにもうなずかれることであるが、しかしそうでないとしても、穴太古墳群をはじめとして古代色ゆたかな穴太の地を故郷に持ったことと、百樹の学問は太いパイプでつながっていると思えてならない。

伴信友は、その七十四年の生涯のうちに二度、京に住んだ時期がある。信友の仕えた若狭酒井侯は、譜代大名の中でも老中を勤める名門であった。信友が初めて京に住んだのは酒井忠進の京都所司代就任に伴う文化六年から、老中に転進する文化十二年までの六年間である。信友は三十七～四十三歳の働き盛りで役職は近習者頭役・表取次兼帯であった。次の京住は最晩年の七十二～七十四歳、次代藩主忠義公の所司代就任に際したもので、この時、弘化三年に信友は所司代屋敷で病歿している。この短い期間に、信友は鈴鹿本の今昔物語や天治本の万葉集など貴重な資料を次々と発見したのである。上田百樹と親交を深めたのは、このうち初回の京住時代であり、それは、信友が宣長の霊前に名簿を捧げて、

歿後の門人と称されるようになってからも間もなくのことであったと推定される。宣長に入門を志望した二十九歳当時の信友は、後年の博学ぶりに較べて、その国学のいかにも稚ない段階にあったことは、中村幸彦博士によってかつて指摘されたことがある（「伴信友軼事」＝『伴信友全集』別巻所収）。宣長学に傾倒しはじめてしばらくした頃、信友は、宣長に親しく接したことのある先輩――百樹に出会ったのである。

信友が百樹死去の翌年に書いた追悼文「誄波伯部百木詞」（『伴信友家集』所収）には、信友と百樹の交渉について、「しかるを信友かくをちなきを、いかにして霊（たま）あひつらむ、此の道のまなびの為には兄弟となりてむと契りてうらなく語らひ」と述べられ、両人が学問のために協力を誓った事情が明らかである。さらに百樹が著書の草稿をまず第一に信友に見せていたことなどが記され、百樹の逝去に信友が腕をもがれたような衝撃をうけたことが述懐されている。また、百樹未亡人の依頼によって信友が遺稿を整理したこともわかるが、現在それらの遺稿は岩瀬文庫（西尾市立図書館）にあって、たしかに信友の筆で標題がつけられたり丁数が書きとめられたりしている。

これらの遺稿のうち、『奇原霊統図考』とあるものは、「古事記伝追補」と角書にあるように、宣長の『古事記伝』、特にその附録として刊行された服部中庸の「三大考」を発展させたもので、古道学的色彩の濃いものである。また『大祓詞後釈余考』は、宣長による大祓詞の注釈書『大祓詞後釈』の補遺であるが、注釈書としてはとるに足らないもので、むしろ付随的に織り込まれた地名考証に意義が見出される。そして、『日本書紀中之考説』と信友によって題された草稿一冊がある。これは書紀について六十七項目の説を記したもので、文化四～七年の日付の貼紙が多く、その当時、百樹が書紀の注釈を企てていたことがわかる。

百樹には、著書ではないが『新撰姓氏録』に綿密に自説を書入れた「上田百樹自筆校合本」があり、百樹が『新撰姓氏録』の研究に携わったことが知られる。この「百樹校合本」は、『姓氏録』の諸本研究の上で重要な役割を果たしているが、現在所在不明である。最近大谷大学には、「上田百樹書入本」と称するこの「百樹校合本」に大変近いと思われる『姓氏録』の零本（六冊のうち第二冊と第五冊）が購入されており、百樹自筆とは思われないが詳細な検討が期待される。小山正氏の『内山真龍の研究』によれば、真龍は伊勢の益谷大学から「京上田百樹地理之人の由」という報告を受けたという。『新撰姓氏録』に綿密に書入れられた百樹の説（上代においては地名と姓氏は密接に関連する）、また『大祓詞後釈余考』にみられる強引な地名へのこじつけと考証、これらは、百樹が「地理之人」だったことを裏付けてはいないだろうか。

佐伯有清氏は前掲思想大系の解説の中で、『日本書紀』の醍醐理性院本を見た百樹が「書体といひ紙品といひ今より四百年ばかり前に写せる本なるべし」と信友に教えた（『比古婆衣』）ことをとり上げられている。百樹が古写本について深い造詣をもっていたことは、信友のその後の資料蒐集に大きな力となったに違いない。そしてまた、伴信友に有名な考証「日本紀年暦考」や書紀の優れた部分注『長等の山風』附録があることを念頭に置けば、『日本書紀』の研究を至上としていたであろう百樹との出会いは、信友の考証学の形成に欠くべからざるものだったと思われるのである。